

佐伯の思ひ出

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

恩人、恩師、知人、友人、は『金言集』に記したのでそれ以外の思い出を二、三記すとしてしよう。

※岡田正一先生

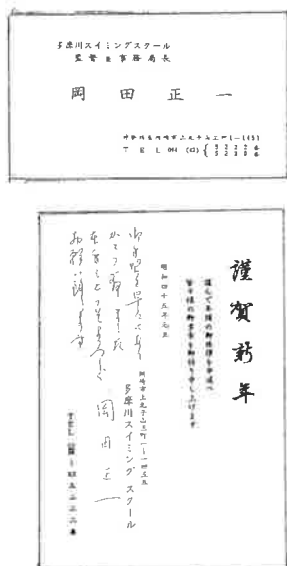
東校に移った小学校四年生頃より(昭和十年?)岡田久兄(現西田病院大塚久先生)と親しくなり、昭和十八年軍隊に行くまで岡田の家に入り浸りだった小生だが、その当時、先生には殆どお会いしていません。私より一回り以上年上の先生は、既に他卿の学校の教師を為されていました。親しくお会いしたのは、昭和二十一年三月、復員して挨拶にお伺した以降で、復員ぶらぶらの小生の職を心配していただきました。トラック助手の定職?に就

くまでのごく短い期間でしたが、岡田鉄工所でお世話になりました。その間、度々囲碁の教授を受けました。終戦後、台湾の収容所で戦友に教えてもらった囲碁で、定石も知らなかった小生に親切に教えてくれました。

昭和二十三年、横浜に出てからは、文通も有りませんでした。谷川、野々下、黒佐、高橋栄子と日本は勿論オリンピックにその名を轟かした諸氏の活躍を紙上で見る度に、諸氏を育てたのは佐伯鶴城高校水泳部監督、岡田正一先生だと、同僚に自慢話をしたもんです。

昭和四十四年秋、先生上京の報にお電話しましたところ、多摩川の土手で会おうとて、多摩川の川風に吹かれながら、三十分程話しました。新たな希望に燃えた先生の意気込みを感じました。先生は生涯若い眼をのばす情熱の尽きない、テイチャーでした。別れぎわに「今、渋谷に仮り住いしている。よい所あれば、紹介たのむよ」と話をされたことが、今も耳に残っています。いただいた名刺『多摩川スイミングスクール 監督兼 事務局長 岡田正一』、翌昭和四十五年の『本年もどうぞよろしくお願ひ致します 岡田正一』自筆の年賀状、これが最後の年賀状となりました。今も大切に保存してあります。

★佐伯市史八四頁に東京玉川スイミングクラブの理事長に就任とありますが、これは間違いです。参考に当時の先生の名刺を添付します。



(昭和45年2月逝去、これが最後の年賀状となりました。)

※出納第二郎先生

東校の初代校長で尊敬はしていましたが、親しくお話ししたことは有りません。

昭和二十一年三月、復員してぶらぶらしていた頃、先生がよくわが家の前庭の親父の仕事場に来ていました。親父に、なんで先生とそんなに親しいのと聞いたところ、戦争末期、防空疎開とて、通りの家屋を取り壊した

時代、各家庭も焼夷弾対策とて天井板の取り外しを強制されたそうで、出納家も天井板を取り外すことになったが、人手がなかったので、親父が手伝ったそうです(手伝うより全部やったと思う)。

親父が生前よく(出納の家は、良い造りをしとる、天井板を剥いだ時は惜しくて涙が出た)と話していた。親父は船大工だったが、棟梁棟梁と言われていたので、大工の腕を見る目も確かであったろう。又、畳のことも話していた(出納の畳は、藁の芯だけで造ったのだから、普通の畳の二倍の重さはあった)とそんな関係で、パージ?で閑職な先生が親父の仕事を見ながら、世間話をしていたのだろう。

その後、昭和三十年市長になり三期十二年間連続無競争で当選している。結婚して帰郷したときおふくろが、出納先生が耕ちゃん(小生の異名)市役所に来ないかなーと二、三回言ったそうだ。戦中の親父の労に感謝の意か?

※土屋五郎活動弁士

昭和七、八年頃、佐伯の町には映画館とて佐伯館、住

吉館そして池船橋を渡った久部に寄席とて明治座が在った(佐伯市史に昭和九年一月、朝日座焼失とあるが、小生記憶なし)。

当時、朝日新聞の販売店は大手町?にあった(ちなみに毎日新聞の販売店は中村にあった。当時は朝日新聞と毎日新聞の二社しか販売店は無かった)。

朝日新聞の販売店と佐伯館とは折り込み広告の手数料のことで特約があったのか、従業員には無料パスが配られていた。又、はつぴ(朝日新聞は朝日のマーク、毎日新聞は星のマークであった)を着て行くと無料で入館出来た。

小学校入学前より兄の応援で、朝日新聞の販売店に行っていたので何時のころからか一人前にはつぴを貸与された。(子供の小生には大きくて、帯をしないとひこずっていた)。

そのはつぴを着て、兄や先輩に連れられて、佐伯館にちよいちよい行った(住吉館は無料ではなかった。二、三度いったが活動弁士の記憶はない)。当時まだオールトーカーでは無く活動写真であった。銀幕の左手に弁士の席がある。

一番印象に残る映画は《月形半平太》である。サカヤキに刺りをいれた幕末の土佐勤皇党の志士月形半平太、格好いい。

弁士が唸る『東山三十六峰、草木も眠る 丑みつ時；忽ち起こる 剣戟の響き；』將又『月様 雨が』『春雨じゃー濡れて参ろう』

その他大河内傳次郎、黒川弥太郎、花井蘭子が画面で大活躍した当時を終わりに世は、オールトーカーの時となり、弁士も影を無くしたが、あの銘せりふは忘れられない。そして世は変わり、あまりにも様変わりして、娯楽の殿堂、佐伯館も住吉館も明治座も佐伯の町から十年程前姿を消したという。又、徳川夢声を最後に活動弁士も日本から姿を消した、淋しい限りだ。

昭和二十二?二十三?年、藤原義江が佐伯の市民に感動をあたえた明治座。そしてサヨリやダスを釣ったころよい川風の池船橋の清流も治水の名のもとになくなった。

明治の人も言った『古里のかわるも うし かわらぬも うし』と。

(平成十三年五月十八日記)